

Q2-1. 私は特発性血小板減少性紫斑病と診断されています。生まれてくる子どもは大丈夫でしょうか？

特発性血小板減少性紫斑病は免疫性血小板減少性紫斑病とも呼ばれる病気で、血小板に対して産生された自己抗体（抗血小板抗体）によって、血小板の減少が生じる病気です。この抗血小板抗体 IgG は胎盤を通過して胎児に移行します。したがって、母体から移行した抗血小板抗体により胎児あるいは新生児に一過性（通常は出生後 2～4 カ月後に自然消失）に血小板減少症が発症することがあります。この発症の割合は 10% 前後といわれていますが、母親が脾臓摘出術を受けていたり、前の子どもが血小板減少症であった場合に発症率は高いといわれています。この病気になると点状出血や紫斑、鼻血などの皮膚粘膜出血が主な症状ですが、頭蓋内出血や消化管出血（吐血や下血）などの重症出血も稀に発症します。新生児の治療としては、症状により副腎皮質ステロイド投与、免疫グロブリン大量投与、血小板輸血が行われます。

（瀧 正志）